第十八章　十九年ぶり

平成3年7月から平成3年十二月までのできごと

新チーム構成メンバー

三年生

マネ　溝　越（淵　中）
選手　松　山（清水中）
選手　浜　口（深堀中）
選手　松　尾（長崎中）
選手　山　口（横尾中）
選手　川　原（深堀中）
選手　白　浜（真城中）
選手　松　下（戸町中）

二年生

マネ　生　島（淵　中）
マネ　西　村（戸町中）
選手　一　瀬（長与中）
選手　山　口（深堀中）
選手　山　川（山里中）
選手　川　迫（東部中）

一年生

マネ　富　永（三川中）
選手　鴨　川（中里中）
選手　神　崎（有喜中）
選手　安　部（横尾中）
選手　平　田（長与中）
選手　吉　村（苓北中）
選手　野　口（土井首中）
選手　三　浦（西浦上中）
選手　吉　永（西浦上中）
選手　下　村（式見中）
選手　宮　田（小江原中）

首の皮

二月の九州大会では中村学園に二〇点以上の差をつけて勝った。そして、三月の韓国遠征と五月の徳島遠征でかなり力をつけた。今年こそ本当に全国制覇を狙えるかもしれない。私は強くそれを意識していた。しかし、中村学園に韓国からふたりの留学生が入ったという情報が入ってからは落ち着かない日々が続いていた。二月の中村学園はガードが力不足だったから戦い易かった。その穴が埋まった。しかも韓国の選手で。

中村学園に勝つか負けるかがなぜそれほど気になるのかというと、まずインターハイのシードの問題がある。九州一位で出場できれば第一シードの名短とは反対のパートにシードされる（と思っていた）。次に、韓国から補強した中村学園の力は全国優勝を狙える力を持っていると思うから、負けたからといって鶴鳴の全国制覇狙いが絶望的になるわけではないが、『大事な試合では中村に負けた』『九州で二位』という心理的な影響を考えた。

いろんな意味で全国制覇を狙うには中村学園がどんなに強くなっていても絶対に九州一位でインターハイに臨まなければならなかったのである。

試合は、中村学園のセンター土井がケガをしていて充分力を発揮できなかったことも手伝って鶴鳴が最初から有利に試合を進めた。前半が終わったところで三九対二三と十六点のリード。誰が見ていても「今年は鶴鳴か」と思う試合だった。

しかも、後半が始まって五分過ぎたところでその差はまた開き、二〇点差になったのである。その時誰が一点差の試合になることを予想したであろうか。もちろん中村学園はプレスを仕掛けてくる。だが、ボール運びの練習はランニングスルーでいやというほど練習している。だから当然、松山と松尾がうま

く運んで難なくかわしていくものと私はタカをくくっていた。
しかし、試合の様相は私の描いたイメージとはまったく違う。誰も強引にドリブルで抜いていこうとはしない。突っ立ったまま、パスで繋いでいこうとする。浜口がフラッシュしてきてもそこへのパスを思い切った崔（韓国）のダッシュでインターセプトされる。みんな、思わぬ点差が開いたために勝ちを意識し過ぎてプレイが消極的になってしまったのである。
そうなってしまうとなかなか立て直しにくい。どんな指示を出してももう何の効きめもない。試合は残り時間の消費と中村学園が詰め寄る点数との追いかけっこで、残り時間が逃げ切るか点数が追いつくかに興味がしぼられるレースとなった。私はもう、残り時間が早く消化されてしまうことを願ってベンチからわめいているだけだった。
「高校生ってわかんないもんですねえ。二〇点差があんなになっちゃうんですからねえ」
おめでとうより先に、関係者から言われたことばはこれだった。
冷や汗百斗。これでとにかく、首の皮一枚で命がつながり、インターハイのシード権を得た。
例によって、九州大会の結果報告である。

平成三年六月二四日付　九州高校総体結果報告（決勝　鶴鳴七一対七〇中村学園）
まず、お詫びと訂正をします。
前回、九州大会で優勝すればインターハイでは第二シードとお知らせしましたが、それは間違いでした。シードは昨年暮れの選抜大会の成績で決めると思っていたものですからこんな風に書きました。シードの資料は昨年のインターハイと選抜大会の両方から割り出すそうです。しかし、シード権はあります。悪くても第三シードは間違いないでしょう。
さて、ご報告したいことがたくさんあります。
まず、私自身のことから…。
十七年ぶりに、食事がのどを通らないし眠れない数週間を送りました。五月中旬に中村学園が韓国から二名の選手を補強したという情報が私の耳に入りました。それからです。全国優勝を狙うには、この九州大会でもう一度中村学園をたたかなければなりません。そうでなければ二月の圧勝など何の意味もないのです。
対中村作戦を考えて頭が痛くなるのではなく、ただただ心配ばかりする日が続きました。
「山口がどれくらい守れるだろうか」
「浜口がファウルをしないで持ちこたえられるだろうか」
「二月には松山が早々に五反則退場したのに勝てたんだから大丈夫だよ」
と、悲観的に考えたり自分で自分を元気づけたりいろいろでした。試合の二日間はまったくダメでした。テーブルに座っても料理の臭いでムッと吐き気がするんです。夜は夜でうつらうつらしていてハッと目が覚めます。
次にチームのことをお話しします。
決勝の中村戦は、十四番の崔と十五番の李をどう守るかが焦点でした。崔はスリーポイント・ジャンプショット・ドライブ何でもござれの選手です。アシストパスも巧いしスティールとリバウンドにももものすごい執着心があります。崔のマッチアップは山口にしました。
この大会に関するかぎり李のアウトサイドシュートは捨ててよいと判断しました。で、李のマッチアップは松尾とし、ドライブからのアシストパスだけ気をつけさせました。松山も塚本にマッチアップさせ、ジルバディフェンスで崔へのヘルプに専念させました。

作戦は大成功でした。中村学園は完全に攻めのリズムをつかめません。前半を折り返したところで三九対二三の十六点差。後半も五分経過したところで四八対二八と二〇点もの差がつきました。しかし、それからの十五分間でこの貯金を使い果たしてしまったのです。見ていた人達は誰ひとりとしてこのような結末になるとは予想しなかったでしょう。

でも、考えてみれば有り得ることです。練習試合ではどんなに強くても、公式戦の緊迫した試合を乗り切った回数の少ない彼女達ですから。そういう意味ではインターハイの本番前に、このように勝ちを意識し過ぎて足がすくむ経験をし、そしてそれをしのいだということは、計り知れない財産になったと私は思ってやりたいです。

最後に、私たちの試合以外でいろいろ思ったことについて…

まず、いやだったこと。

自分達が不利な状況になると試合中に審判に悪態をつく監督がいました。度を過ぎた審判へのアピールをする監督とそれに同調して身勝手なヤジを審判に飛ばす保護者応援団がありました。どちらも、選手達のまじめで一生懸命なプレイをしらけさせてしまう見苦しいものでした。

両方の選手がぶつかってこっちの選手がころんでも、こっちがファウルの場合もありますし、ボールをカットに行った選手の手が目をつついたとしても、そんなことをわざとやる選手なんていないでしょう。試合というものはこうして見ると、周囲の人々の態度によって、純粋で美しいものにもなるし人間の醜さをさらけ出してしまうものにもなります。私達は、選手の汗を心から讃えてやれるおとなでありたいと思います。

審判もそうです。重箱の隅をほじくるようなジャッジをして「俺は細かいことまで見えてるんだぞ」と、自己顕示ばかりが目立つのが何人もいました。試合は選手が主役。審判はサポートです。

次にさわやかだったこと…

男子決勝は実に見応えのある試合でした。残り二秒でゴールされて北谷が大濠に負けましたが、北谷の選手の試合態度ぶりは見事でした。決して会場の興奮や審判の際どいジャッジに心を乱すことなく、常に試合の成り行きを把握し、冷静沈着、時として大胆に勇気溢れるプレイを折り混ぜて、四〇分間観客を釘付けにしてくれました。力を持っているのにまだまだ持て余しぎみの鶴鳴にとって、大変参考になった試合を見せてもらったと思っています。

共石シリーズ

九州大会の優勝は、全国制覇を狙うには必須条件だった。選手達の心の中にも、「昨年からずっと、大切な試合の危ない場面を乗り切ったことが一度もない」という思いがあった。 それは、「私達は公式戦には弱い」という、悪い意味での自己暗示となっていたはずである。

それを取り払うにはこの九州大会で優勝することが不可欠であった。そういう意味ではインターハイよりも九州大会のほうが鶴鳴にとっては重要だった。その関門を突破したのだから、もうあとは前進あるのみである。

さて、全国制覇を狙うのならば強いチームとたくさん練習試合をしなければならない。話しは少し戻るが、練習試合で大変役に立ったのが、韓国に行く前に瓊浦高校の男子と練習試合をたくさんしてもらったことだった。それは、韓国のスピードに対応できるように慣れさせておくというのが狙いだった。おかげで韓国に行ってから、相手のスピードに面食らうことはなかった。

しかし、弊害もあった。韓国のコーチ陣が口を揃えて指摘したのは、鶴鳴は長身者がふたりもいるの

にオフェンスリバウンドに跳び込まない、ということだった。その理由は私にはわかっていた。瓊浦高校とやり過ぎたからである。

男子を相手にしているとなかなかオフェンスリバウンドが取れない。そして、跳び込んで取れなかった時の被害が大きい。アッという間に速攻で決められるのである。だから鶴鳴の選手たちは、シュートを打ったらオフェンスリバウンドに跳び込まず、急いでセイフティポジションに戻るのである。

それが松山の方に特に表れた。それがまた、浜口の疲労を倍加させることにもなった。浜口はインサイドでプレイするから、一応リバウンドに行く。しかし、空振りが多い。松山が一緒に跳んでくれていると浜口が空振りした反対側で松山が拾うことがあるから空振りが徒労に終わることは少ないけれど、ほとんどが空振りに終わるとガックリくるのである。そんなわけで、男子との練習試合には限度がある。

それで夏場になり、いよいよインターハイや九州大会が近付いてくると、今度は三菱重工の女子チームとたくさん練習試合をしてもらった。これはずいぶん役に立った。そして仕上げが共同石油との三連戦だった。

七月十八と十九の両日、中村監督が七人の選手を連れて長崎に来た。目的は鶴鳴バスケットの応援である。これを学校では学校行事として取り上げた。初日、全校生徒を体育館に集めて中村監督に講演をしてもらい、午後に試合をした。体育の授業だけでなく一年生全員が見学。二日目も午前と午後に一試合ずつ。二年生全員と三年生全員が交代で見学した。

テレビの取材陣は追いかけ回し、学校ではこのように授業を打ち切ってまで学校行事としてバスケットの強化をバックアップする。もう、なにがなんでも優勝しなけらばならない。

試合は、私の評価と中村監督を含めた周囲の人々との間に差があった。中村監督も学校の先生方もみな「強いよ。よくがんばるよ」と言ってくれた。

しかし、私は不機嫌だった。特にガードの松尾に対しては注文が厳しかった。まだまだやれるのにやっていない。うっかりしていて大事なところを見逃している。そんな注文が松尾にとぶ。それを聞いていて中村監督が私に言った。

「おまえなあ、トップ（共石の中野選手）はこの前のジョーンズカップで世界のガード陣を相手にほとんどみな封じ込めてきたんだぞ。あいつにマークされているにしてはトモはよくボールを運んでいるよ。大したもんだ。おまえは日頃のトモをよく知っているから不満なんだろうけど、この試合に関する限り鶴鳴はトモで保っているようなものだよ」

共石は、ガードにジョーンズカップにスタメンで出場した原田・中野・伊勢の三人、フォワードにベテランの岸川、センターだけが新人の川崎という布陣でやってきた。スコアは、第一試合が八四対四八、第二試合が八二対五〇、第三試合が七六対四九と大差であるが、試合全体の印象は点差以上に健闘しているという雰囲気があった。

しかし、私にとって一番印象に残ったのは中村監督が松尾のことについて言った一言だった。一緒にいる時間が長いとどうしても相手の悪いところが見えてきてそれが気になる。そしてそれをつつく。そうして、知らず知らずのうちに選手のやる気を無くさせてしまっているのである。私がこの二日間で得たもっとも大きな収穫はこれだった。

コーチは見え過ぎるがために、さわらなくていいところまでさわってしまう。そこに周囲の人々の客観的な目が必要になってくるのである。私は、試合が終わってから選手達に言った。

「トモに文句を言い過ぎだって言われたよ。やっぱり人間の目なんて、他人から見てもらわなければ見えていないことがたくさんあるんだなあ」

息つく暇もない共石との試合で身も心もクタクタのはずなのに、試合が終わったあとの選手の顔はさわやかだった。私は二〇年近く前、桜馬場中学校の『まぼろしの名チーム』を率いて、当時中村監督率いる鶴鳴高校と戦った『鶴鳴シリーズ』を思い出していた。

浜　松

鶴鳴にとっては、中村監督時代の昭和四七年に優勝して以来十九年ぶりのインターハイ優勝。

私にとっては昭和五一年の春、教育委員会に配属されたのを振り切って、コーチとして生涯を終わろうと決めて鶴鳴に引き取ってもらってから十五年目にやっとつかんだ栄光である。長かった。ほんとうに長かった。

しかし、優勝の感激は昭和四八年の全国中学選抜大会の優勝の時の方が強かった。あの時は、「このチームは俺が創ったんだ。どうだ、見たか」という気持ちがあった。だから勝った後の充実感は何ものにも替え難いものがあった。だが今回の優勝はホッとした気持ちの方が強かった。私自身にとっても選手達にとっても浜松のインターハイは『勝ちたい』試合ではなく『勝たなければならない』試合だったのである。

私にとっては、鶴鳴に採用してもらう時、「校長になるのが教員の最高峰なら、私はバスケットの最高峰を極める方を選びます」そう啖呵を切って教育委員会を辞めた手前、勝てないまま定年を迎えるわけにはいかない。また、私にとっても選手にとっても、前年から騒がれているにもかかわらず期待外れに終わっているのでこれまた「今年もダメでした」というわけにはいかない。そんな状況の下での最終年度であった。

大会期間中、もっとも緊張したのが準々決勝の試合だった。相手は東京成徳だったけれども、東京成徳だから緊張したのではなく、準々決勝という試合に対して緊張した。トーナメント形式の試合では準々決勝がひとつの大きな壁である。ベストエイトまでは、並みのチームでも運や組み合わせによって勝ち進む事がある。しかし、ベスト四というのは本当に実力がなければなれないものなのである。

だから私の神経は準々決勝の試合前日はもちろん、試合当日の朝から試合までの間ピリピリしていた。選手の細かな表情の動きさえも見逃さない。だけど、「明日は大事な試合だから」とか「ベストエイトがひとつのヤマだから」などとは決して言わない。普通に、ごく普通に私は振る舞っていた。しかし、私がいくらカムフラージュしても選手が見破っていたのか、それとも選手自身も私と同じように、ベストエイトがひとつの壁だと意識していたのか、明らかに選手達は緊張していた。

みんなギクシャクギクシャクしていて動きが噛み合わない。点差こそ七五対六二と、一応安全圏の点差で試合終了になったが、終始リズムに乗り切れないままの試合だった。試合終了の笛が鳴った瞬間、内容的には不充分な試合だったにもかかわらず、松山がこぶしを握って「ヨシ！」という動作をしたのを私は見逃さなかった。やはり、彼女もこの試合が非常に大切な試合だとわかっていたのである。

この準々決勝を過ぎると、もう私の心は静かだった。私は、八年前の高校総体の決勝戦を思い出していた。あの時は圧倒的に不利な滑り出しで始まった試合を除々に挽回して一ゴール差で勝ったのであったが、終盤に打てども打てども入らないポイントゲッター大神のシュートを心配して、私の横に座っていた前田部長（現　校長）が私の肩をつついて心配そうに「おい」と言った。私はその時実に落ち着いていて、「あいつのことだから三本連続して落としたら三本連続して決めてきますよ」そう言った。

そして、決勝の名短戦もあの時とほとんど同じ気持ちで采配をふるうことができた。勝たなければならないという気負いも、桧舞台に立っているという気取りも何もなかった。自分を追い込み、あれだけ

気負っていた気持ちがこんなに静まるものかと自分でも不思議なくらいだった。ただただ、「思いっきり力を出し切ってきてくれ」と祈る気持ちで選手の動きを追っていた。

優勝後のプレスインタビューで私は、「もう死んでもいいです」と言った。それがあちこちで取り上げられた。そのことばからどれだけ私の感激が大きかったかという意味で取り上げられたのであるが、私の心は「遂にやったぞ！」という感激ではなく「おかげさまで」という思いの方が強かった。

私がグッと詰ったのは、キャプテンの松山のインタビューを聞いた時だった。松山は報道陣から優勝の感想を聞かれ、ちょっとことばを選んだ後に「『これで堂々と胸を張って長崎に帰れるんだなあ』と思いました」と言った。優勝の瞬間に涙は出なかったが、このことばを聞きながら私は涙をこらえるのに必死だった。「辛かったんだなあ。すごいすごいって言われながら昨年は鳴かず飛ばずで終わったので、今年はすごいプレッシャーがかかっていたんだなあ。あいつらもあいつらなりにいろんなことを考えていたんだなあ」そんなことを考えると、彼女達と過ごしたさまざまな出来事が走馬灯のように浮かんできてたまらなくなった。

ワン

スターティングメンバーの中にひとりだけ二年生が混ざっているのが今年のチームだった。その、ただひとりの二年生が一瀬だった。松山や浜口があまりに大物過ぎるためにそちらの方ばかりが騒がれていたが、実は一瀬が頭角を現してきたことによって鶴鳴の全国制覇狙いが現実のものとなった。

一瀬のデビューは、彼女が入学する前の春休み合宿だった。長崎・福岡・佐賀から数チームが集って強化試合をしていた。この春から新三年になる田端達や新二年になる松山達は三月下旬にひまわり杯に参加して帰ってきたばかりだったし、合宿の成果も上がったので、長崎合宿はバックアップの選手達を育てるのが目的だった。

一瀬は、入学式をまだ終えていない新入生だったが鶴鳴の選手達に混ぜて試合に出した。「一瀬、交替だ。思いきってやれ」鶴鳴のボールでバックコートスローイン。トントントントンとフロントコートへガードがボールを持ち込み一瀬へパス。次の瞬間一瀬は何のためらいもなく、いきなりスリーポイントを打った。「え？」私はもちろん、鶴鳴の選手達もみんな度胆を抜かれた。それだけではなかった。次の場面でまた一瀬はみんなを驚かせた。

それは鶴鳴の速効の場面でのできごとだった。相手のディフェンスもすばやく戻ったのでシュートに持ち込むところはちょっと難しくなったが、その難しいシュートを決めたのが一瀬だった。一瀬はドリブルフェイクでひとり抜いた。そしてレイアップに持ち込もうとしたが相手のセンターが戻ってブロックショットに来たので、それをかわしてダブルクラッチでゴールを決めた。それが一瀬の強烈なデビューだった。性格は無口で身体つきも一見弱々しく見えるので、一層みんなを驚かせた。

しかし、いくら素質があっても田端や松山達上級生の中に割って入るには相当時間がかかる。だから、一年間はスタメンに入ることができなかった。そんなわけで、対外的には一瀬は知られていない。が、チームの中ではその力を高く評価されていた。

対外的な試合での一瀬のデビューは二月の九州大会だった。はっきり言って、他のチームは松山や浜口をどう抑えるかという対策だけに気をとられ、一瀬までは気が回らなかったと思う。だから、決勝の中村学園戦は浜口や松山よりも一瀬の方が目立った。そうして一瀬は鶴鳴の全国制覇狙いの一役を担うようになった。

しかし、この浜松インターハイでは不調だった。「入った！」という場面でスリーポイントを何本も落とした。ジャンプショットまで狂いだし、届かないシュートすらあった。そんな一瀬を見るに偲びなくて私は後半の途中で三年生で控えのシューターの川原に替えた。

川原に替えた時は一瀬だけでなく、決まったと思われるシュートがポロッと落ちたり三〇秒のオーバータイムを取られたりで、チーム全体のオフェンスのリズムが非常に悪い時だった。そこで登場した川原はいきなりジャンプショットをスパッと決めた。まさに起死回生のシュートだった。それで鶴鳴のリズムは元に戻り、確実に勝利へと近付いて行った。

終盤、私はまた川原をベンチに下げて一瀬をコートに送った。不動のスタメンがベンチに下げられっぱなしではプライドに傷がつくと思っての配慮だった。しかし、それは無用だったとあとでわかった。

試合が終わったあとで一瀬はこう言った。

「私、リョウさんがジャンプショットを決めた時涙が出ました」

私は聞き返した。

「どうして？　嬉しかったから？　それとも悔しかったから？」

一瀬は答えた。

「嬉しかったからですよ」

私は一瀬が、自分の活躍の場を川原に奪われた悔しさが心の中にはあったかのかも知れないと思って聞いたのだった。もし、そのとおりだったとしても、それはスポーツ選手の精神的逞しさの一種だと思っているから、私は満足したに違いない。

しかし一瀬の答えは反対だった。そして一瀬のそのことばに私は感動した。こんな仕事をやっていると他人の手柄を羨み、自分だけが目立とうとするようになってくる。一瀬のことばには自分を殺してチームのことだけを思う純粋さがあった。長い間の人間関係に歪んでしまった私の心が一瀬のことばでサーッと洗われたような気がした。

仁　聖

みんなから喜んでもらえるという意味では、勝つのは久しぶりの方がいい。その騒がれようは大変なものだった。帰りの車中、諫早駅から報道陣のカメラが乗り込んできた。車中の様子を取材のカメラが追う。長崎駅に列車が滑り込むと私たちは度胆を抜かれた。

ホームに待機していた報道陣が私達が降りる列車の出口に殺到し、カメラの列を作る。すばやく脚立が組み立てられライトがパパーッとつく。列車の中から窓越しにその光景を見ていた私達はどんな対応をしたらよいのか戸惑った。

「おい、何だよこれ、俺たちどうすりゃいいの？」

「ヒャーッ　すごーい」

選手達も私も車内でまごまごしていると、

「自然に　自然に　そのまま降りて！」

報道陣の中から誰か誘導してくれる人がいて、私達はその声に誘導されてホームに降り立った。改札口を通って広場に出るとたくさんの人が集まっている。横断幕もある。県や市、高体連の幹部の人達が暑いさ中背広姿で出迎えてくれている。歓迎行事が待ち構えていたのである。

歓迎行事の後は長崎市役所、県庁、新聞社、テレビ局と挨拶まわり。その日はそれで終わったが翌日からがまた大忙しだった。引っ切りなしに取材や出演の依頼、そして講演依頼。講演はほとんど断った。

講演はまだ私が県大会でさえ勝てない頃もしばしば依頼があった。そういう方面からの依頼は断れないが、全国優勝したからといって群がってこられるのは気が乗らなかったからである。

「全国優勝したから急に偉くなったわけではない。全国優勝した年だからとりわけ苦労が多かったわけでもない。長崎でベスト四に入れなかった時も今も、何ひとつ私の中で変わったことはない」

私はそう思っていたし、全国優勝したから何か特別のことを聞き出そうとか特別の苦労話をしてもらおうという臭いがプンプンするのは嫌いだった。

そんなこんなで一週間があっと言う間に過ぎ、長崎はお盆の祭りを迎えた。長崎のお盆はさだまさしの歌でも知られるように精霊流しで大変な賑わいである。そのお盆のお祭りに合わせて、三月にお世話になった韓国の仁聖高校を招待した。もちろん強化試合もする。

スケデュールは、

八月十二日　仁聖長崎着　仁聖　対　三菱　　試合　三菱と仁聖の夕食会
十三日　　仁聖　対　鶴鳴　　試合　鶴鳴と仁聖の夕食会
十四日　　仁聖　対　鶴鳴　　試合　鶴鳴と仁聖の夕食会
十五日　昼間観光（オランダ村）夜はお祭り見学　鶴鳴と仁聖の夕食会
十七日　仁聖帰国

という日程である。

試合は接戦だったが鶴鳴が二回とも勝った。初戦は旅の疲れもあって仁聖のコーチもしかたないという表情だったが二戦目は必勝を期してゾーンを敷いてきた。韓国の人達はゾーンディフェンスにかなり自信を持っているようである。仁聖の選手達も二戦目は確かに気合いが入っていた。シーソーゲームのまま後半までもつれ込み、勝負がどっちにころんでもおかしくない試合展開になったが際どいところで浜口の高さが物を言い四点差で鶴鳴が逃げ切った。これで鶴鳴対仁聖は鶴鳴の二勝一引き分け。

夕食会の挨拶で仁聖の朴校長先生が言った。

「鶴鳴が三月に韓国に遠征に来られた時にも言いましたが、私達は韓国で試合をした時も日本で試合をした時も日本のチャンピオンチームに負けたことはありません。それは、私達のチームがあまり強くないチームだった年でもそうでした。だから、今年の鶴鳴は本当に強いんだと思います。そして、私達は鶴鳴が日本一になられたことを、自分達が優勝したように嬉しく思っています」

鶴鳴が強いと言った校長先生のことばはお世辞半分だとしても、自分達のことのように嬉しいと言ったことばはお世辞ではなく本音だった。

三月に韓国に遠征した時、仁聖の選手達の家に鶴鳴の選手が招待されたということは前に述べた。ロッテワールドにも一緒に遊びに行った。そんなことでお互いの選手達はほんのわずかの期間に姉妹のように仲良くなった。

一方、私と沈コーチは私が韓国に居る間中ほとんど一緒にいてバスケットのことを語りあった。朴校長先生は日本語が堪能だから通訳兼世話役でみんなの先頭に立って動く。そんなこんなで私達と仁聖の人達は急速に親しくなった。だから、朴校長先生が「自分のことのように嬉しい」と言ったのは本音であり、私達もまた仁聖のことについては我が事のように思っていたのである。

二試合消化した翌日は一日中両校とも観光を楽しんだ。オランダ村・バイオパーク、そして夜は精霊流し、みんなみんな本当に楽しそうだった。

「山崎先生、ここに来たのは何回目？」

オランダ村で沈コーチが私に聞いた。

「初めてだよ。そう言えば、私もロッテワールドで聞いたね、同じことを。その時沈コーチも言ったよ。初めてロッテワールドに来たって」

互いに、バスケットに追われているから家族を連れて自分の国の有名観光地に行ったこともないのに、こうしてお客さんを連れてなら来る。しかも、オランダ村は以前日本に遠征した時選手を連れて来たことのある沈コーチは二回目。地元の私は初めてというのでオランダ村は私より沈コーチの方が詳しかった。それがおかしくてふたりでゲラゲラ笑った。

翌日、仁聖は長崎空港から釜山に向けて発った。みんな泣いた。あたりをはばからず、鶴鳴の選手も仁聖の選手もみんな別れを惜しんで泣いた。見ていた私たちも思わずもらい泣きしそうだった。わずか一回ずつ、互いに訪問しあっただけだったが、仁聖とこんなに仲良くなったのは、互いに求めているものが共通していたのだろう。本当にすばらしいチームと私たちは知り合いになれた。

中国

仁聖を送り出したらすぐ祝勝会だった。事務は全て事務室の職員がやってくれたがこれが大変だった。招待者を誰にするか、挨拶は誰にやってもらうか等々、その気の使い方は大変なものである。こういう催しというのはそういった気配りをしなければうまくいかないらしい。県・市・高体連・体協・バスケットボール協会・学校関係・ロータリー関係と多岐に渡る中からバランスよく招待者を決め、挨拶を依頼する。事実その手順や人数配分のことでちょっとだけ暗礁に乗り上げそうになった。当日の式典そのものは華やかで賑わったが、そこにたどり着くまでにはいろいろ大変なことがあるものである。事後処置も含め、前後一ケ月くらいは鶴鳴の事務室はバスケットボール部事務局になったみたいでとても気の毒だった。

それが済むと今度は日中親善大会が待ち構えていた。インターハイの優勝が決まった時点で鶴鳴と名短の責任者が別室に呼ばれた。国際親善試合の打ち合せである。日体協と鶴鳴と名短三者の話し合いで、愛知県で行なわれる日韓親善大会に名短が、中国の鞍山市で行なわれる日中親善大会に鶴鳴が出場することに決まった。「韓国には行ったことがあるから中国の方がいい」と、喜んだのが間違いだった。中国遠征では大変な目に逢ったのである。

八月二五日夕方五時、中華航空機で私達は大連空港に向けて飛び発つ予定だった。しかし、五時になっても機内に案内する気配がない。三〇分過ぎ一時間経っても同じである。しばらくすると放送があった。片側のエンジンが不調で今部品を取り寄せているから、それを取り替えて午後八時頃の出発になるという内容だった。しかし、八時になっても何等変化はなかった。しばらくしてまた放送があり、部品の交換に手間取っているが、一〇時には飛び立つというものだった。しかし、一〇時になっても機は飛び立たなかった。

いらいらしながら待っていると、もう今日は飛べないから品川のホテルに一泊してもらって翌日の午後二時に飛ぶということを知らされた。宿泊するのなら洗面具や着替えが要る。しかしそれはもう飛行機に積み込んであるから取れないという。踏んだり蹴ったりで私達は夜の十一時頃成田を出発し品川に向かった。品川のホテルでは夕食が用意されていたがそれを食べたのが夜中の十二時を回っていた。

翌日また成田に行くと、午後二時になっても機は飛ばない。昨日とまったく同じだった。放送がある度に出発時間遅れを知らされ、その度にいらいらし、結局飛び発ったのが夜中の一〇時半。前日から約三〇時間待たされての出発だった。しかし、飛び発ったからといって喜んではいられない。それから約三時間半真夜中の空を飛び、大連空港に着いたのが深夜の一時。それから税関の検査を受け、二時に今

度はバスで大連空港を出発。それから四時間の旅で、鞍山に着いたのが二七日の朝六時である。
それから、

七時　　早宴（朝食）
七時半ー十一時　　日本代表団休息（仮眠）
十一時半　　日中代表スタッフ打ち合せ
十二時　　歓迎レセプション
十三時半ー十五時　　鞍山人民政府等表敬訪問
十五時ー十七時　　日中両コーチの指導下で日中両チームの合同練習
十九時半ー　　日中双方のコーチと裁判長（審判長）合同の打ち合せ

これが着いた日の日程である。

三〇時間待たされた挙げ句、真夜中のフライトと深夜のバスの旅、そしてわずかの仮眠の後のこのスケデュールである。一五時からの練習では鶴鳴の選手達はフラフラしていた。この時点では練習をするとか試合をするというコンディションではなかった。

私はプロゴルファー達のことを思った。あの人達は先週アメリカで試合をしていたと思ったら今週は日本に帰ってきて試合をしている。時差ボケはないんだろうか？。それもアメリカの試合から次週はオーストラリアに飛ぶとなったら今度は時差ボケばかりではなく気候もがらりと変わる。生活習慣や食事、いろんなものが違う。そんな中でトッププロと言われる人達は常に自分の最高に近い力を出し切れるのである。

インターハイの優勝以来、公的な行事で振り回されたばかりではなく今度はこうしてとてつもないスケデュールで試合をさせられようとしている。しかし、本当の強さというのは、練習を熱心にやれば身につくのではなく、こうした環境の変化やその他諸々の条件を乗り越えて初めて身につくのである。私はそのことを強く強調し、選手に言い聞かせた。

試合は三試合だった。相手は中国選抜と遼寧省選抜である。中国選抜といっても全土からではなく、広東省と黒龍江省の二省から選抜された選手達であった。どちらもすごい。鶴鳴とは体格がまるで違う。鶴鳴の浜口はなんとか中国のチームに入っても長身の仲間に入れてもらえるが、一七九センチの松山は中国チームに入っても真ん中より下でしかなかった。

初日の試合は中国選抜が相手で、この試合は八七対七三で負けた。とんでもないスケデュールでかなりコンディションを崩していたこともあるがファウルに悩まされた。特にポストプレイの浜口はほとんど腰をつかまえられて身動きができない場面がしばしばあった。にもかかわらず笛は鳴らないのである。

「これが国際試合さ。あと二試合。いいか、絶対ひるむなよ」

試合が終わった後で私は選手にそう言った。選手達も私も腹が立って腹が立って仕方がなかった。

「クソ！　明日は見てろよ！」

部屋に帰ってもその腹立たしさはなかなか治らなかった。

翌日の遼寧省選抜は中国選抜よりもっと乱暴だった。国際親善だけど私も腹が立ってベンチから飛び出して抗議したくらいだ。しかし試合はシーソーゲームだった。中国に着いて三日目だったのでコンディションも戻って来ていたし、何より選手の気迫がすごかったからである。

総じて、オフェンスの技術と体位においては中国の方が上である。しかし、ディフェンスと精神力は我々の方が優っていた。このことは最終日のレセプションでも中国の関係者がこぞって誉めていた。

しかし、どんなにがんばっても試合には勝たせてもらえなかった。後半残り五分。その時のスコアは鶴鳴五一点遼寧省選抜四七点である。そして試合終了時のスコアは鶴鳴が五三点、遼寧省選抜が六七点

であった。
その五分の間に何が起こったか。こちらに五反則退場が出たわけでもないし負傷者が出たわけでもない。ただ、勝たせてくれないのである。試合はレスリングの様だった。終了後ベンチに引き上げてきた時、ガードの松尾は右の目の下に青いアザができていた。あちこちに引っ掻き傷を負っている者も何人かいた。
「最後の試合はどんなことをしてでも勝つぞ！」
そう言って、その日は早く寝た。

最終日。再び中国選抜。二日目と同じ接戦だった。しかし今度は私が細工をした。試合が鶴鳴に有利になりそうだと途端に鶴鳴に笛が厳しくなることはわかっていたので、後半こちらがリードしているにもかかわらずオールコートプレスに出たのである。
審判に細工される前に先手を取ったのだ。とにかく接触プレイはだめだ。つかまえられていても相手のはファウルにならないし、こっちのは成功してもトラベリングだ。だからプレスでインターセプトを狙い、失敗したら相手もノーマーク、成功したらこちらもノーマークでレイアップという展開に持ち込んだ。
これだと何も起こらないから審判は笛の吹きようがない。それでもこじつけで吹かれ、極どくなったが六八対六六で逃げ切った。選手も私も飛び上がって喜んだ。タイトルがかかっていたわけではないが、三〇時間の遅発から始まったこの中国遠征で、遭遇するさまざまなできごとを次々とクリアーしたことが嬉しかったのである。

成田経由で長崎に帰り着いたのが九月二日。長崎県協会のスケデュールでは、暮れの全国選抜大会県予選が八月三一日と九月一日の両日に行なわれていた。鶴鳴はこうして日中親善大会に出場するので帰国後特別に飛びつき決勝で試合をするということが決まっていた。それは九月五日と定められていた。その相手は島原南高校だった。こちらの都合で試合を特別にやってもらうのだからこちらから出かけて行かなければならない。
ところがちょっとやっかいなことが起こった。長崎に着いた日から私も体調を崩したが選手の中にも体調がおかしい者が数人出た。強行日程と中国の水が合わなかったのか、或いは疲れか、ほとんどが下痢をした。マネージャーの生島は学校を休んだ。選手の浜口は夜中に救急病院にかつぎ込まれた。入院、点滴、安静、しかし五日には試合がある。浜口は五日の朝、病院から直接みんなに合流して島原に向かった。
島原での試合は浜口を出さなくても負ける心配はない。しかし、全国優勝のチームが島原にやってくるというので近隣の中学や高校から見学に来るというから私は浜口を連れて行った。もちろんスタートでは出さない。交替要員で出場させたが、それもほんの数分である。見学に来る人達は鶴鳴の下級生を見に来るのではない。全国優勝を果たした主力選手達のプレイを見に来るのである。
ひと昔前なら、上級生は出さずに下級生だけで試合をし、できが悪かったら怒ってどなりちらしながら試合をしたかも知れない。しかし、私も歳をとり、いろんな立場の人々のことを考えるようになった。町営の体育館を借り切り、島原南高校の生徒のみならず、近隣の高校生や中学生が多数見学する中、島原南高校の松添校長がわざわざ私のところまで足を運び、
「山崎先生、おめでとう。そしてきょうはわざわざ出向いてもらってすみませんね」
そう挨拶された。そうやって、鶴鳴の全国制覇を心から喜んでくださる人々の前で、下級生の練習のた

めの試合をするわけにはいかない。

七　尾

九月の一五・一六の連休、鹿児島に行くことになっていた。それは前々からの約束だった。鹿児島の国体チームと練習試合をするのが主目的だったが中学生のクリニックもやることになっていた。鹿児島にはなかなか熱心な若い指導者が多いのでおもしろかった。

しかし、チームのコンディションはこの頃どん底になっていた。インターハイ後の様々な行事消化でチームの練習が割かれる。それを埋め合せようとして練習ができる日は欲張った練習になる。それで疲れないわけがない。それに加えて中国遠征後の体調の崩れである。

私は鹿児島から帰るとスタメンの選手は数日間休みをとらせ、バックアップの選手達だけで練習を進めた。そして、スタメンの連中が練習に参加するようになるとほとんどが体力トレーニングとフットワークという内容でメニューを組み立てた。チームプレイどころではなかったのである。身体がガタガタになってしまっているから、休養した後でもう一度身体づくりからやり直さなければどうにもならない状態になっていた。

「今チームオフェンスの練習は必要ない。身体さえ元に戻れば国体は大丈夫だ」

私はそう言って選手には納得させていた。結果を先に言うと、七尾で一〇月十二日から行なわれた国体はまったくぶざまな負け方で終わった。準決勝で中村学園中心の福岡に八九対四九の大差で敗れたのである。実際、休養明けのスタメンが練習に戻ってからは日を重ねる毎に動きが良くなっていった。チームオフェンスの練習はまったくやらず、身体づくりだけで乗り込んできた七尾だったが、これも日を追う毎にスムーズになっていった。こうして、国体に「臨む選手の体調は完全に戻った。

「チームオフェンスは試合を消化しながら思い出していこう」

長崎を発つ時にそう言って出てきたが、準々決勝までは順調に戻ってきたので気をよくして、

「よし、二冠狙いだ」

と少し浮かれていた。それが甘かった。高校生というのはいくら修業を積んだようでもやっぱりこどもだ。わかりきっていることでももう一度確かめ、訓練し、事に臨まなかれば力は出せないものである。

「身体がこれではどうにもならない」

という、身体づくりに対する焦りもあった。

「なーに、チームオフェンスなんかすぐ思い出すさ。あれから韓国とも試合をしたし中国とだってやってきたんだ」

そんな甘い気持ちも確かにあった。

「試合はいやと言うほどやってきたんだ。だから、試合形式は飽きているはず。わかっていることをくどくどやって飽きさせたらまずい」

そんな気持ちもあった。

だが、結果的にはチームオフェンスのもたつきでやられた。相手の福岡の調子も手がつけられないほどよかった。しかし、それはこっちの調子と相対的なものなので、こっちがもう少し持ち堪えたら途中で崩れたかもしれないのである。

とにかく、動けば味方同志がはち合わせをする。パスしたらちょうど選手がそこから場所を移そうとした瞬間だった。と、そんなこんなの連続であっという間に試合は挽回不可能の状態になってしまった。九月いっぱいと一〇月に入って国体までの期間約四〇日間、まったくチームオフェンスをやらなかった

のが敗因のほとんどだった。

再びナウ

一〇月二八日に松山が腰痛を訴えたことは第四章で述べた。重複する部分もあるが少し詳しく述べよう。二ー三日前から痛みを感じ始めたがそのうち治るだろうと思って私に申告しないでいたと本人は言う。もう三回目だから本人もだいたいの様子はわかるのである。今回は打ったり捻ったりしたものではない。次第に痛みを感じるようになったらしい。

私は松山の腰痛について分析してみた。長年選手を見てきているとだいたいのことがわかる。この選手は足の型が膝を痛めやすい格好をしている、というような体形的なもの、この選手のフォームはどうも腰を痛めやすそうだとかいう技術的なもの、それでだいたい予測が当たるのである。

しかし松山には体形や技術には何の欠陥もなかった。だから私は彼女の能力が問題なのだと思った。能力がないからなのではなく、有り過ぎるからなのだと考えたのである。彼女を見て、「松山はバスケットやめてもファッションモデルでやっていけるよ」という人は多い。それほど細いのである。その細い身体ですばやいプレイをする。痩せているから当然筋肉量も少ない。それなのに、プレイのある瞬間にはすばしこいガードの松尾もかなわないほどの切れを見せる。彼女の筋肉はおそらく筋の神経支配がすごいのだろうと思う。

彼女の筋肉は一瞬のうちにすごいエネルギーを出せるのである。それ故に、筋および筋膜、それに靭帯に負担をかけることが多くなるのだろう。私はそう考えた。

松山のプレイはしばしば私をコーチではなく一観客にしてしまう。彼女のプレイに見とれて感心してしまう場面がしばしばあるのである。松山を預かる時に私は、自分の選手というより国から預かった大切な財産だと思った。そしてその思いは学年が進む毎に強くなっていった。絶対に松山は障害持ちの選手にしてはならないのである。

松山は一〇月二八日から十一月二十五日まで完全に休ませた。十二月二二日から始まる選抜大会を前にして、エースを一ケ月間休ませるのである。その気持ちを察していただきたい。その松山が軽いランニングで三日間身体をなじませた後、シューティング等の個人練習を始めたのは十二月一日だった。そして十二月一〇日、

「今日からチーム練習の中のできそうなメニューに入ろうと思います」

と申し出て来た。

「わかった、できそうなメニューではなく、おまえが入れてほしいメニューがあるだろ、それを言え」

「はい。ウーン…三対二は是非入れて…」

松山が出場できての全国狙いである。私は、松山がこうして欲しいと言えばすべてそれに合わせるつもりだった。松山はみんなの練習を、自分のためだけの練習メニューを入れるために大幅に変更することに対して遠慮がちだった。それで私は、松山の気持ちを察してハーフコートのオフェンス練習を松山のために入れた。例によってディフェンスはダミーにしたオフェンスの動きの合わせの練習である。

私も選手ももっとも心配しているのが、松山と他の四人の動きの呼吸が合うかどうかということである。それを解消しなければならない。このハーフコートオフェンスはディフェンスはダミーなのでスピードも強さも松山ができるレベルでやれる。それを松山の負担にならない程度の時間こなしたら残りのメンバーで今度は動きの激しい練習をやるのである。

松山は選抜までに残された日数と自分の調子から計算したのか、十二日の練習で自分が参加するメニ

ューをひとつ増やした。私は彼女がやっているのを見て、「大丈夫かなあ」と思ったが「そこまでやれるようになったか」と嬉しい気持ちもあったので何も言わなかった。

しかし案の定松山は翌日私に訴えた。

「先生、きのうちょっとやり過ぎたみたいだから今日はちょっと控えてみます」

「ウーン　やっぱりか。俺もちょっと心配ではあったんだよな。……。わかった。でも今日だけじゃなくて思いきって三日間休もう。それで軽くなればいいし軽くならなかったらもう選抜まで突っ走るしかないじゃない」

私は、暮れの選抜には何がなんでも勝ちたいという気持ちと、松山を無理させて傷物で高校を送り出すわけにはいかないという気持ちが交錯し、はっきりした答えを出せないまま三日間が過ぎた。そして松山は十六日の練習からまた復帰した。復帰したといってもハードなメニューは省き、スクリメージに半分入るという状態は変らなかった。

私の神経はチーム全体のできばえに気を配りながら一本だけ松山専用の神経回路が用意されていた。松山の一挙一動にその神経は注がれているのである。何かちょっと激しくやる場面があると、その後に松山が手を腰に当てて気になる様子をしないかどうか、息切れしないかどうか、そんなちょっとした動作を見逃すまいとしてピリピリしているのである。

松山はしかし、私が気になる動作はまったくしなかった。ひょっとしたら松山専用の神経が注がれているのを察知して、敢えてそんな動作は一切しなかったのかもしれない。私は、

「どうだ？大丈夫？　痛くない？」

というようなことを聞けなかった。聞いたら答えが返ってくる。その答えを聞くのがこわかったのである。答えが私を安心させるものであれ不安にさせるものであれ聞くのが怖かった。そして松山は結局その状態で選抜大会に乗り込んで行った。

ピリオド

十二月二六日。

鶴鳴バスケットの平成三年が終った。

第二二回全国高校選抜優勝大会準決勝。

中村学園に五六対五三で負けたのである。

五三対五三で残り十二秒。中村学園のバックコートスローイン。中村学園はセンターの土井につないでのゴールを狙うのかと警戒していたがそうではなかった。中村学園は高い位置で一対一を仕掛けてきた。まず高塚が松尾を抜こうとしてドリブルを始めた。しかし抜けなかったのでそのボールを李にパスした。李も同じように、マークする一瀬を抜こうとしてドリブルするが抜けない。李は右に左にと二回ぐらいドリブルをして時間ぎりぎりになったのでステップバックしながらスリーポイントシュートを打った。それが入って勝負が決まった。残り一秒だった。

「インターハイで久々の優勝を長崎にもたらし、長崎っ子の血を沸かせた選手達。ほんとにごくろうさま。そしてありがとう。君たちのようなチームはおそらくもう二度と出ないだろう。長崎という辺境の地で、しかも長崎出身者だけで、このように選手が揃うことはおそらく今後奇跡に等しい。スポーツ活動の全てから、もはや地元ということばがなくなろうとしている。そんな中で、後に続く長崎のスポーツ少年少女に大きな夢と希望を与え、日夜チームづくりに励む指導者達に勇気を与えてくれた君たちの

功績は計り知れないほど大きい」
これは、戦い終えた私の素直な気持ちである。

振り返ると、大物達が鶴鳴に入ってくると決まってから三年間があっと言う間に過ぎてしまっていた。この大物達は自分の幸せのためにバスケットをやるよりも、周囲の期待に応えるために勝つことを宿命づけられた選手達であった。

この、勝つことを宿命づけられた彼女達に私はよく熊谷繁子の話をした。熊谷は昭和五五年卒で身長が一七七センチ。一〇年に一度の逸材と騒がれ、共同石油入社後もその素質を充分に活かされて日本リーグベスト五等数々の栄光を得、全日本チームのエースとしても活躍した選手である。ニックネームをサムといった。

「サムはね、初めの頃『私は普通の女の子になりたい』が口癖だったよ。素質があるだけにみんなから期待され、苦しくても苦しい顔もできず、いつも何をやるにもどこからか誰かが自分を見ている。それがたまらなかったんだなあ。その度に俺は言ったよ。『俺たちに私はないんだよ。俺たちは何をやるにも公なのさ。弱かったり無名だった頃は誰もが有名になりたいし強くなりたいと思う。そして強くなって有名になったりすると今度はそれがわずらわしくなる。しかし、それはもう許されないんだよ。もう後戻りはできない。辛いけどね』とね」

みんなの期待に応えようとすれば当然自分を見つめ直すことも厳しくなる。私も彼女達の素性を徹底的に抉り出さなければならないことが苦しくそして辛かったし、彼女達も自分であって自分でない自分と戦うことでずいぶん壁に突き当たった。

松山は思慮深く冷静に物事を見つめる選手で、時々「こいつは俺よりおとなじゃないかな」と思わせることがあったが、松山の行動は先を考え過ぎて私をしばしば苛立たせた。

浜口は中学時代はよく試合中に過呼吸症候群で倒れることがあったことで証明できるように、パニックに陥りやすくわがままで泣き虫だった。しかし、興奮しやすいタイプというのは言い換えれば燃えやすいタイプとも言えるので、それがプレイにも両極端に出た。

松尾は意思が強く絶対にへこたれない選手だった。意思が強いということは頑固さでもあった。

山口は自分の得意なパターンになると絶対にはずさない選手だった。しかし、自分の領域は絶対に守るということは新しいことに挑戦するにはものすごく臆病だということでもあった。

より高い次元のものを追及しようとすれば彼女達の長所であるが故の短所が際立って目立ち、それをたたき直すのに私は鬼になった。それは本当に苦しいことだった。

地元の放送局が『旅立ちシリーズ』というタイトルで番組を創るための取材に来た。今年度、スポーツで活躍した高校生が卒業する。鶴鳴高校バスケット部の松山さん浜口さん、K高校サッカー部のN君、H高校ラグビー部のF君、それぞれが高校三年間で何を思いそしてこれからどんな夢を持って高校を巣立って行くのでしょう、というような内容の番組である。

「先生、三年間手塩にかけて育てられた彼女達もいよいよ卒業です。どんなお気持ちですか？」
「感傷？　ハハハ　そんなものはないよ」
マイクを向けた記者は、私の口から「可愛くて手放したくない」とか「共に苦労した思い出が走馬燈のように浮かんでくる」とか、ロマンチックなセリフを期待していたのだろうと思う。しかし、私の口か

ら出たことばはそんなものだった。さらに私は付け加えた。
「私はねえ、彼女達を私の選手とか私が育てた選手とは思っていないんですよ。彼女達が入って来た時から、私は国の宝を預かったという感覚でしたよ。だから、高校三年間で伸ばしてやることはもちろん、絶対にケガをさせて卒業させるようなことがあってはならないと思っていましたからね。今、彼女達を無事卒業させることができてホッとしているところで、懐かしんだり感傷に浸ったりする余裕はありませんね」

選抜大会が終わって一ケ月後、全日本チームのスタッフと選手が決定した。その中に高校生ではただひとり浜口が選ばれた。当然地元の報道機関は殺到する。その記者会見が校長室で行なわれた。いろんな記者がいろんな質問をした。
「浜口さん。部活動をやっていない普通の生徒は日曜日なんか自由に遊んでいる。そんな時に君は練習をしていた。うらやましいなあと思ったことはありませんか」
浜口は答えた。
「いいえ、『私達はすごいことをやっているんだぞ』と、自慢する気持ちがありましたからうらやましいとは思いませんでした」
私はこのことばを聞いた時、グッと胸が詰まった。今年で指導者生活が二五年になろうとしている。四半世紀だ。その間にいろいろあった。嬉しいことも悲しいことも。しかしそのすべてをなくしても、この浜口のことばを聞けただけで二五年間指導者をやってきた甲斐があったと思った。
浜口が、すごいことを「やったんだぞ」と言ったのなら大したことはない。それはインターハイで優勝したことを自慢しているだけだ。しかし、「やってるんだぞ」という進行形は、毎日の自分の生き様のことを意味している。自分が毎日見、聞き、やっていることを「すごいこと」と言える以上にすごいことが他にあるだろうか。しかも、あの、なき虫だった浜口がこんなセリフを記者団の前で言ったのである。
私は、浜口が言ったこのことば、
「すごいことをやっているんだぞ」
と、松山がインターハイのインタビューで言ったことば、
「『これで堂々と胸を張って長崎へ帰れるんだなあ』と思いました」
と、一瀬がインターハイで言ったことば、
「リョウさんがジャンプショットを決めた時は涙が出ました」
は、一生忘れないで胸にしまっておきたいと思う。